

連歌新式追加并新式今案等

影印本文
寛政十年写本
(近思文庫
山内潤三蔵)

連歌新式追加并新式今案等 目次

本文……………	81	
連歌初学抄……………	125	
和漢篇……………	129	
		146
		137

〔影印〕〔翻字〕



連歌新式追加 并 新式字集等

一韻字事



物名 朝夕字同之 与韻字不違之

物名 他准之 物名 朝夕字同之 与韻字不違之

韻字 他准之 韻字 朝夕字同之 与韻字不違之

或の字 他准之 或の字 朝夕字同之 与韻字不違之

或一用 他准之 或一用 朝夕字同之 与韻字不違之

懐紙 他准之 懐紙 朝夕字同之 与韻字不違之

一編廻事

萱といふ句はあつたを付て又紅蔭を付て
 〴〵舟といふ句はあつたを付て又紅蔭を付て
 字がふたつは萱といふ句は黒を付て
 又赤蔭を付て新の勢を付て〴〵地を付て
 〴〵萱を付てお紙は電雷不可然
 萱は留まるとは付て又赤蔭を付て然
 萱といふ句はあつたを付て又紅蔭を付て

子なりけり抑いひて返代不付之
文を致ふ一書以不平極し

一遠隔廻事

般合花と云ふは風とを氣とを分て又
石で封之敷句と爲りしと一府子
下媼之他催之花は封は風氣乃敷を来
漢不及沙汰飲用は紙新於一馬新武花
又竹と云ふは母と付て又叔字を封之

わけ類又々情也

一本新事

三向より入るに同之但迹あり

あゝと不工極之凡新古今以見此有

三向より入るに同之但迹あり

動静は撰集で用
中の方と又記さる

中奇堀河

陰百首似有少くはあり雖為名代也

東澄弄少くは用之堀河院也度一白首此

者より後改入近代集一為中奇と例

他人乃あるに依りて其の用を分る
不_レ好用之儀也

後晉書國師集

源氏物語に大なりとあるは之句とある

但同下二句とあるは之句とある

其事に依りて其の用を分る
之句とあるは之句とある

一 難物神用事

假令毫毛の句とあるは之句とある

寫 噴子鳥 只鳥是 郭公 黃蝶
 日映 松出 鈴虫 蒼 虫 熊 席
 龍 猪 おけし初 鬼 おき敷き之虫一使る目程
之、但自足非、儀五可則
降奇及之 女 おめ 昔 古 夕言 昨日
 昨日 夕言 材白 雨 然色年 礎 嵐
為二句 本枯 朔月 夕月 隱家 外西
 方乃こ ひ 樞 園 おけ 松 出 鈴虫
 蒼 虫
如新或名各為一府一、物後台を年只
虫一は外松虫鈴虫不馬、名、虫又一、月、

石段の形を名づくるに松を吟はす小名智恵集
下用く此の松核楸木替同病又下用之 毫馬

小名小松 面を以て 面状 一より馬

物園事又意多障の物にほけ又但 是百 けがかり
馬に介駒用ぬる病の人の整人 下より

春多 人々も久しからず 秋多 老も少も
人々も久しからず 秋多 老も少も

只つたり 初 居る 多 多 歌 多 又
多 多 歌 多 又

一 座 二 白 物

晴 只 一 代 神代 春風 只 一 座 の 風 一 代
只 一 座 の 風 一 代

秋月 松風 月 白 只 一 座 白 一 座 白
只 一 座 白 一 座 白

呉有行人を二麻 只一麻を一とく一
クサミ又クサミを二とく一 車 只一

車一水車一聲 三分力
わくわく車は自拉のより 帯花の 花の葉の

花の葉の 花の葉の 花の葉の
花の葉の

花の葉の 花の葉の 花の葉の
花の葉の

一花の白物

花の葉の 花の葉の 花の葉の
花の葉の

花の葉の 花の葉の 花の葉の
花の葉の

花の葉の 花の葉の 花の葉の
花の葉の

おのいけくのをてー
ゆきといけかゆー
鐘 只一入相一乃故一
一乃故一乃故一乃故一

自然の各がさふ
る細出年
夜 寧ろのさういふ
さういふさういふさういふ

官 神祇會も兵ホ者ニ
但一とさういふ
朔風 物霜さの物字

怯紙と
夕風 夕霜の夕字
馬 只一重の
多一少馬

材多あふ、一馬駒も
馬はあのもち多
別れの物
火 火字
玉

字 似物麿界切小
葉字 葉の葉竹の葉
あいた

寝字 如様寝むねや
めろを寝いけや
天字 屋字
戸 極
同

戸のさういふ
同

一 一座五句物

世 只一屋世の中の方一窓の世一あ世一ほ世一ほ
 せりやうみせりやう信州と連懐せ二より一
 ういほひのせりやう梅 只一紅梅一をま一を梅一
 のせりやうす月 只一青梅一をま一を梅一
 自然のま 只一沙階一神一一名一も一梅一
 一の下 只一階一をま一を梅一
 一の下 只一階一をま一を梅一
 一の下 只一階一をま一を梅一

一可憐打越物 只一連同懐紙と物

岩屋 開戸 陽家 栖るもの 野々

居所、田舎 居る 材木 薪 只一濱底

下種在斯也

霧降物新
膨松竹葉水
の類

解物意上人雲法乃摩訶胸の能言此能

霞より雲の移りゆく時分
曙の光

月日次乃日小月次の月終むく時

のを付冬枯乃野山より植物採本 貞翁

山乃色 乃色 杜尚 紙組
一依 自 作 也 杜尚 草

秣 草字、下为二句

園
菽
秋
田
鑑
大

田乃々田、鷹麻、うゝくゝとて、松は、
 一向不二、集く麻と、うゝくゝは、松、
 の松、心の松、松は、二句、
松は、二句、苗代、松は、二句、
松は、二句、
 下、前、冬、松、乃、老、屋、
 浮、鴻、愿、山、と、お、松、と、松、
松、と、お、松、と、松、人、倫、人、倫、
 昔、破、衣、裳、山、と、お、松、と、松、
松、と、お、松、と、松、生、類、二、執、
 依、白、神、一、
 放、生、又、水、也、
 津、の、水、乃、水、乃、の、
 山、城、乃、水、乃、
 始、お、松、
 志、け、の、

いふ言ふ句 水邊へ嬉しき所へは句懐紙
浦へ入る人 山へ入る人 阿へ
他准へ 己と亦越境へ

重よりの 温日へ古宗原へ冷きへ
冷きへ

身かむとや思ふへ日切へ梢へ末梢へ

子日書ふ新 御着 新ひとてさう山へさう川へ
さうとてさう山へさう川へ

願ひ見ふと云秋の言も想ふと云の字

而新に歌新に陰 陰へ下向く人へ新に不
婦へ下向く人へ新に不

遠へ通神なりと云 潤子袖の露はと云

鳥獸の鳴き 別、由恋のべい 別、恋の白
 別、由恋のべい 別、恋の白
 正長男 思ひ入大 分神ぬとぬと 但不ぬた切
 といふ事 然るに ずいぶやうなけり 文字愛
 まうつ 称えん子愛けり 子曙 今日、所
 下子矢 可決月年乃矢 小き 義、笠夕立
 此は 然るに 替り
 書、の字 明書、夕字 期夕、書、は字 止
 のめ、期 時、く、名、終、入、派、く、は、夕、字、期、不
 遠、く、も、ら、な、く、あ、わ、い、は、調、り、わ、い、

皆可極其誠
讀字をたゞ
く、此は言光陰にふりひり

然月もいひゆきも一わん
不丁帰る程重又曰
野、形字をい字

暴風、
和名
本枯、本の字青、保家風

氣本當、本の字
破破と云く
神作也
野邊山邊

日なり天より淡路道
山脈と云く
又句一極
最

明、名字
又句
入相、入字、違字

萩乃都
水自かき風と云く
又極其誠
歎をいふ

お入らん極其可極其誠
齡の三十卒

一可隔五句物

同字曰風
風與風
風雲
風雲
風雲
風雲

徐志摩 野山 浦浪皮水

送_レ后_レ夜_レ歌_レ本_レ之_レ本_レ第_レ第_レ馬_レ之_レ香

獸之獸也之也意之也旅之極水邊也

名色 居所之場 善不善 迷悟之途

懐稱述懐詞中一昔古老生乳親。昔衣星宿神
隱家。推力憂力令。わ。如。也。且。後。を。述。懐。と。意。不
慮。取。詞。を。述。懐。と。用。事。又。し。う。う。と。下。を。述。懐。と。是。際。衣。て
の。人。教。と。述。年。有。と。述。所。と。如。の。墨。係。必。御。才。と。と。衣。服

衣字

新衣或女衣もて居る但五その衣新
衣川衣衣松衣字のやうに居る

松字

松竹松浦山
同なり

田字

田白甲と
厚甲あ

竹字

竹田
竹海

おのゝ猿舟忌永門ふ
い制下居る也

一可分別物

花乃波 花の波 花の雪 松風の雪 木

葉の雪 川雪 花乃雪 夏雨 入る雪 冬

月乃霜 月乃横戸 木乃衣 木乃衣 木乃衣

花乃雪 花乃雪 花乃雪 花乃雪 花乃雪

舟大者方、増く似わ、然様障能、一様當時下用おけあ方、二浪
合、わお、増く、下、浪合、なる様、を

浪乃荒

水を可、増く

袖乃露

袖、増く、可、なる様、を

浪乃荒

水の可、増く

袖乃露

袖、増く、可、なる様、を

浪乃荒、増く、可、なる様、を

一水邊解用事

候合、候、一、水、邊、解、用、事、一、は、ま、く

く、水、邊、解、用、事、一、は、ま、く

物、成、七、次、丁、明、名

下、の、水、を、上、へ、思、難、波、
水、を、上、へ、思、難、波、

志賀 北水色 地味 杜若 菖蒲 芦 蓮 菰

開加結 懸樋 水玉 多洗水 急水 都鳥

日向 蓮屋 霞網 小田 返布 曝 硯石

溪河 あみまき 二橋 月乃 水 神 糸 くらひ

朝乃 玉水 蕨代 番 水色 山 あふ 園 山

日 蟬 い 浦 あふ 雲 満 雲 橋 岩 襦 新

所 小 猿 鹿 津 敷 山形 中 治 乃 川 乃 山 北山 杉丸

河 乃 泊 彫 寺 唯主山雲乃 山松屋唯 清 貝 寺 唯主満定 寺水也

維波寺

收

木堂

冷蕭然

准師告與
可通山類

鶴林

植物考

謝心泉

一、山部解經卷之八、山部解經

山人

炭焼

雪山

五子山

宝海

山歌水調

寫古蹟圖

葛城

をうりて西の
膳用のみは下

松涛

山形不用爲之然吾郡上土下石山銀
水色之佳在年一水空三

田義三鴻

攝政王明
少乃山

泰山

後白子下
西山扶

遲橋
松苑

荻歸魚

島集

夏又中氣入
冬又中氣入

錐子

下也

從鴉の雛
冬

かの

甚幸

春日象

小糸 賀茂 傳時 冬 明良會 昨夜 小忌衣
 日 薩 絲 也 共 神 祇 年 內 立 春 龜 椿 柏
 蓬 蓬 淡 弟 忘 草 靖 鈴 鷗 鴉 浮 葉
 松 緑 是 龍 文 緑 也 堀 屋 宮 居 寺 野 乃
 尺 放 里 神 乐 是 非 都 御 階 百 葉
 雲 上 九重 是 石 亦 而 簾 用 尺 麻
 沛 府 是 店 市 草 枕 紫 戸 松 門 松 窓
 菅 笠 篠 盾 草 盾 浮 木 流 木 以 木 葉 取

繪_エ書_カ草_{クサ}木_キ 依_ヨて物_{モノ}を_カき 催_ヒ馬_{ウマ}京_{キョウ}中_{ナカ}名_ナ 一_{ヒト}症_{シヤウ}
 衣_イ裳_{ショウ}と色_{イロ}花_{ハナ}木_キ 石_{イシ}の植_{ウエ}物_{モノ}縁_{ヅミ}を_カき 木_キ も_モも_モも_モも_モ
 志_シと_ト中_{ナカ} お鴨_{カモ} あ_アい_イふ_フ 竹_{タケ}宮_{ミヤ} カ_カ名_ナ中_{ナカ}と_ト植_{ウエ}物_{モノ}
 刺_サ草_{クサ}蒲_フ 末_{スエ}松_{マツ}山_{ヤマ}藤_{フジ}枕_{マクラ} 福_{フク}延_{エン} 君_{キミ}延_{エン}
 蓮_{ハス}が_ガ宿_{ヤド} 蔭_{カゲ}宿_{ヤド} 夕_{タタ}顔_{オモ}宿_{ヤド} 草_{クサ}延_{エン} 草_{クサ} ハ_ハ草_{クサ}と_ト
 水_{ミヅ}鷗_ウ 水_{ミヅ}也_ヤ 菰_コ老_オ火_ヒ 冠_{カ冠}枕_{マクラ} 床_{トコ} 書_カき
 又_{マタ}寝_ネ 神_{カミ}樂_{ラク} 夕_{タタ}園_{エン} い_イさ_サ中_{ナカ} 寝_ネ也_ヤ 浮_ウ寝_ネを_カき
 二_ニ月_{ツキ} 尺_{シヤク}草_{クサ}也_ヤ 鶉_ウの_ノ床_{トコ} 二_ニの_ノ也_ヤ 三_{サン}曉_{キョウ}

夏世 常灯明をく 明をく 解りけ
 三月の世 石灯の入 鐘乃々し 石灯
 烽火 新いひも程 不ふお 夕月夜 北夜 雷 雷 北夜
 夕日 曉時分の時の字 名所のまゝ 春
 字 日字 梅 花 雷 神字 了
 權 胡字 但てきえ 庶多 日 畫 稲妻 月 日
 下 細 じき 衣 裳 事 冠 留 衣
 佐保水の衣 北衣 北 平秋の句

應乃秋の句なり又平秋の句（此等）打木
 云句（此等）又松の名不（此等）生田
 句（此等）又松の名所隠題も不（此等）
 模（此等）本の名と云（此等）一松志（此等）名（此等）本字
 五句一松（此等）躑（此等）躑（此等）卯（此等）花（此等）藤（此等）
 あ（此等）小舟泊（此等）山（此等）棹（此等）娘（此等）龍（此等）田
 昨秋山（此等）山（此等）年常迷懐（此等）懐（此等）舊
 引合（此等）下用（此等）迷懐（此等）入教（此等）河（此等）為（此等）一句（此等）所（此等）一（此等）

釋教に才本也てその字相合とてなり

東遊東子や神紙 野の文は少 神楽の名は

菴准信經秋葉とて用 橘朝 橘貝名はけんてあ

櫻人 橘田下る 葉つじりき 野庭 橘

河の花 貝あ 水日の曜りい 水の如く

むきや かなし 河北家名は河のつとやうて

いさかに 船釣 舟海士は 玉座

夕ノ草 石の字は字や 心の糸 糸の志はく

鷺 水巻 菅 日お 船 海路は毎に様々
依り所なき様也 せうはま

の光を月より見る人 目小二句一様一様

下爲秋 鞠の意 意のよす 一のかき 國の名よは乃君

下傳 國名々名所 すは 井城 國の海 名所也 名神

北名所 あつり子 越後 一煙 寺 もろめ 三下

かゝ國と云ふ

一句數

春秋意 以上五句春秋の句い不至三句を不用し
 意の句只一句をくわへる

夏冬猿神祇稱教述懷
懷旧無常
在日門

山類水邊
居下
至之句連

一
魅用事

岩嶺洞尾上
麓坂咽谷
鳴水邊
鳴

山之開山所也
榊瀧
杵炭竈
山

義山角也
他山
海浦江湊堤渚鳴沖磯

于隅岸汀沼河池泉湖
川之水邊
祇也

浪水求塩水室
以之付水
水邊用也
清水ウミ

如云云也水邊用也浮木船渡塩燐
 塩屋水多取蛙子鳥杜若菖蒲
 芦蓮夏也海松夏也和布若和布也
 藻垣夏也草萍海苔剛伽結魚網
 釣舟筏洗水懸樋下極
用之朝床里窓門唐戸極
 薨薨壁隣牆窓戸室戸窓戸
 庭外面用也人我身友父母誰同也

人倫也 主 独 媒 目 親 子 とも 人 倫 也
 月 を あ け ー 花 を あ け ー そ う け 山 姥
 本 玉 あり 人 倫 花 の あ け ー 月 の 友
 花 を あ け ー 月 を あ け ー 云 々 云 々 ー
 依 白 神 一 者 人 倫 也

一頁代一懷紙引過一才二句一惡
 本懷名取未釋如兩名付

石取要出

右大概准建法武作一但商世好七可
 用外多不及取換只為山崗度洋端粗

不實必件

後晉光園攝政殿



應安五年十二月日

師判

新式今案集書

右應安新式考付道ノ龜治是亦不可遠
背但未定事近月相論ノ題目示我以
思意料同ノ又訪宗祐法師之見粗可記是
計外漏脱ノ条ノ及儒府評論者自他加野
酌後日訪先達ノ決之也

亨徳元年

壬申

十一月

日

後常恩寺殿

開印所刊

連歌初學抄 後常恩寺殿所作

一彼古以賦物爲題式百韻式五十韻
每句用其賦物近代發句斗了賦物
いふ法脇句以下一向不取い仍改似無
不洽聊不忘旧儀多也發句取賦物
い時二渡言不取い依令山櫻い
云發句人字奇名いい山い渡取也
自余准い又二渡賦物同い一字落取

賦物也 近代も百韻まであり毎句悉用し
 尤有其興二字反音等 賦物は十句連
 郭教句斗、常、取、賦物と字上古老
 百韻中 不犯中比而八句斗忌
 近代も少頃下溜も今仍近年も
 至才三句賦物、字斟、酌、
 一發句脇句、同字并拘多と云而八句、
 中、隣、借、五句、於、下、等、

一聯句中一之字其季亦字中

暖芳 乃花之字 紅日淑氣燒痕 踏青

芳草

乃花之字

新綠

霖

雨之字

暑

炎熱

乃花之字 茂字

清和

四月之字

初涼

初涼 冷爽

金氣

黃落 秋也

枯

乃花之字

臘

探梅

去之

春信

守歲

乃花之字

信

書信

客

非賓客

一葉身

舟

泊字

漂泊

如此之類

錦字

市溝葉

私語

此等類
悉也

人名

人倫性之類
人倫但之類

名利

世之類

浮跡

出處

此等類
出處

一絲

約絲之類

禪定

錫

此等類
乃教也

開
白
也
判



和漢篇

一大概法可用連歌式目本

一和漢共以五句為限但至漢對句一及

六句事

一景物草木虫魚教和漢下通用事但

兩況皆古曉老宋以和漢各用之

一四季可隔七句同字并意述懷亦可隔

五句

同連歌式

自餘隔七句一物一隔六句月

應安以來新或今業進加條并
 近代用摺篇目亦依多其端末字
 常逢商量而今故是勒以爲一冊
 但和未了及子或將漏式之載
 以結後君子志同者從之亦宜乎

文龍辛酉林鐘上澣



肖柏



寬政戊午清明

平安 澁文雄





翻
字
本
文

凡 例

一 これは本書に附載した『連歌新式追加并新式今案等』（寛政十年写、近思文庫蔵）の説解に資するために翻字したものである。

二 翻字に際しては紙幅の経済上、原本通りの丁数・行数・字詰にはせず、全て追ひ込むこととした。ただし原本各丁の表・裏の区切り目に「印を附けて脚部にその丁数（オ・ウ）を示して影印本文との対照を便ならしめた。

三 原本に句読点は一切存せぬが、読解に便利なやうに適宜分ち書きの体裁を採った。

四 字体についてはなるべく原文のそれに近づけるやうに努めたが全同とまでは行かなかつた。この点何卒ご寛恕を乞ふ。

連歌新式追加并新式今案等

一 韻字事

物名

朝夕字同之
他准之

与詞字不嫌之

物名与物名可嫌打越

時雨夕暮なとこま
る事近代不嫌之

詞の字つゝけり

かならむして

如此類可嫌
打越他准之

哉の字 近代發句の外 ねかひかなとて 或一用之 此外は不可用之 ねかひかな 懷紙をかへて可用之

1才

一 輪廻事

蕉と云句にこかると付て 又紅葉を付へからす 舟にては是を付へし こかると云字かはる故也 煙と

云句に里と付て 又柴焼なと薪の類を付へからす 他准之 夕立に雲を付て 打越に電雷不可然 雪に富士をつけて 又氷室不可然 他准之 夢と云句に面かけと付て 月花をつくる」事 おもかけ物といひて 近代

1ウ

不付之 更其理なし 曾以不可嫌之

一 遠輪廻事

假令花と云句に 風とも霞とも付て 又不可付之 數句をへたつといふとも 一座に可嫌之 他准之 花に付る風霞の類 近來強不及沙汰歟 用此儀 若猶可守新式歟 又竹と云句に世と付て 又夜字不可付之」如

2才

此類 又遠輪廻也

一 本歌事

三句にわたるへからす本説物語 同之 但近哥あらは不可嫌之 凡新古今以來 作者不可用之至續後撰集可用 本哥之由又被定手 本哥
 ハ堀河院百首作者までヲ取るへし 雖爲近代作者證哥には可用之 堀河院兩度百首作者まで 縱雖入近代
 集可爲本哥之例」但人のあまねくしらざる哥をは 付合に不可好用之 依事可引用證哥也

後普光園御筆

源氏物語は大部の物なれば 三句すへし 但同所は二句斗すへき也

雖有此說不庶幾用本哥用古事之条可有重性斟酌云況於同物語乎

雜物駄用事

僻令春といふ句に弓と付て 又ひくかへる」をすなと付へからす 是用なる故也 本末とは付へし 是駄
 なるゆへなり 打越に駄あらは 本する又不可然 長と云句に繩と付て 又短なと不可付之 是駄なる
 故也 くる引なとは可付之 是用なり

一座一句物

總舉一隅尤物都爲一座一句物云自餘推之

若菜 歎冬 躑躅 杜若 牡丹 橘女郎花 檜原 櫨 如此植物 鶯 喚子鳥 白鳥 春也 郭公 螢 蟬 日 3ウ

晚 松虫 鈴虫 蠶 虫 熊 虎 龍 猪 如此動物 鬼 於生類嫌之虫之由有旧説云但鬼神之儀不可潤強不可及其沙汰歟 女 如此物 昔 古 夕暮

昨日 明日 夕立 村雨 雨 但近年爲二句之物 礎 嵐 近年爲二句 木枯 朝月 夕月 隠家 外面 なるこ ひた 樞

閨 如此類 松虫 鈴虫 蠶 虫 如新式者各爲一座一句之物然而近年只虫一此外松虫鈴虫等各稱機等皆同面又可用之 春雨 小雨等 急雨之類 4才

也 雨そゝき 雨夜 雨之外一在之 馬 駒同事也意馬隨行駒ハ此外也但馬之外駒用來之鶴たつの類也 遅日 此外水日有 春寒 さえかへるなと詞をかへても只一なり 秋寒 や、寒き夜さむな

といつれにても只一なり 砌 不可爲居所 床 鳥獸之床又

一座二句物

曉 只一代 代 神代 春風 只一春の風一但不用之 秋風 松風 同前 五月雨 只一梅雨一梅雨不審云 夕 今日 庵 いはいほり一但云替すとも有へし 4ウ

故郷

名所只故郷引合て一旅二

岡

只一名所

池

同前

湊

同前

宿

只一旅一

老

一鳥木

男

只一桂男

庭

只一庭訓

命

只一虫の命

時雨

秋多

5才

鷹

春一秋一殘雁春秋の中にあるへし

猿

只一

旅字

只一旅衣

老

一鳥木

男

只一桂男

庭

只一庭訓

命

只一虫の命

時雨

秋多

5才

なり

にけり

おもひしに

物を

如詞置所を

戀しく

戀しき

うらみ

うらむ

玉緒

命のと懐格をかへて有へし

嶺

雖爲名所可爲

海

只一名所

5才

あした

只一色と云て

鶴

只一

名残

なとに

面影

只一花月

さひしき

又

玉緒

命のと懐格をかへて有へし

嶺

雖爲名所可爲

海

只一名所

5才

花

と松とも云替て一梢の秋此中にあるへし

法

佛法の外に法令の法有へし

稲葉

をしねと云かへ

塵

一の外塵の世な

嶺

雖爲名所可爲

海

只一名所

5才

と又別に

野邊

小野たるへし

軒

云替此外也

筵

只一法筵

待戀

逢戀

別戀等之類

各二句

をち

は

5ウ

なし

上句下句各一

もなし

同前

詞

ことの葉と云て一ことの葉の道とハ此外にあるへしと云

筵

只一法筵

待戀

逢戀

別戀等之類

各二句

をち

は

5ウ

一座三句物

春月

三月月一

夏月

同前

冬月

同前有明秋の外ニ一三月月ハ四季の中

神

只一神代

花

懷紙をかゆへし似物二花ハ此外なるへし

柳

只一背柳一秋

櫻

只一をそ櫻

6才

爲

三句之由有其沙汰然而可謂無念乎所註四句三句共以不可有子細賦云

紅葉

只一梅櫻なとに一草の紅葉一

落葉

柳一松の落葉一

萩

只一夏の間に一燒原一遺萩懷紙をかへてあるへし但秋の外他季二一

文

戀一旅一文學一

狩

狩鹿

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

一

一座四句物

雪

此外春の雪一似物の雪は各別の事也近來爲四句之物春雪雪面用之

有明

四季各一

關

只一名所一戀一春秋をとむるなと云

氷

只一

7才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

只一名所

塩

只一燒

瀧

只一名所一瀧つ瀧一花瀧

岸

只一名所

文

戀一旅一文學一

狩

6才

可然

薄只一お花一すくろ

都

螢火は 玉字 似物褒詞
在此中

葉字

草の葉竹の葉等
は可附五句

寢字

如旅寝ぬ也ぬ
ると云詞此外也

天字

屋字

戸

樞関戸谷の戸などの
間折をかうへし

7ウ

一座五句物

世

只一浮世の中の世一戀の世一前世一後世一浮世之中号名世事難
借用只速懷世二たるへしと云；但仏の世は前後の世の内二可用

梅

只一紅梅一冬木一青梅一紅葉一青梅
紅葉などは自然の事なるへし

橋

只一御階一梯一名所一うき
橋一御階は可爲各別歐浮橋

夢のうきはしなと
云て一あるへし

可嫌打越物

付可嫌同懷紙之物等

岩屋

關戸

隱家

栖

すまゐ

以上居所
ニ嫌之

居所

田庵

居所

村霧

籬

同前

濱庇

有説ニ依句
可嫌居所也

皇居

の故郷

8才

居所

里と云字ニ
ハ可附五句

霧

降物

靄

臘

松竹草水などの煙に

聳物

雲上人

雲居の庭等

胸の煙

思ひ

8才

の煙

同前

霰にはしりに

降物

時分与時分

夕暮と
曙之類

月に日次の日

日に月次の月

種まく

野の色付

8ウ

冬枯の野山等に

植物

埋木

同前

山の色

野の色

植物嫌打越也

植物ニ草かり

株

草字ニ可
爲二句

園

藪

秋田

8ウ

如此之類秋の一田の事田ニ雁鹿なとくはへてハ

植物に一向不可嫌之鹿をふるとあらは可嫌之

芦屋

蘆火等

水邊

浮嶋原

山ニ打越を嫌と云
但不可爲山類也

竹ニ草木

心の松

心の杉

植物にニ

苗代

植物ニ不嫌之然
而二句可嫌之

下萌

冬枯の

8ウ

爲神祇

云

方生

又水
過也

驛

馬駒とは
可嫌其面

馬のはなむけ

同前

人倫与人倫

老ニ昔

砧ニ衣裳之類

きぬと云てハ
五句可嫌之

生類ニ贅

依句
可嫌

8ウ

ふのうらみ

「わひなと云句

水邊ニ可嫌打越名所ニハ三句懷紙かはりて忍山
とも岡ともあるへし浦とは有へからず他准之

已上打越嫌之

9才

雲にくもる

溫日と長閑

涼

冷

寒

冷

身にしむに寒

いにしへに故郷

梢ニ末

松に子日

音に

9才

聲

響

聲ひ、きニ音羽山音無川な
と不可嫌之但可依句吟也

顧ニ見

タニ春秋の暮

樵夫ニ木の字

面影ニ影

影ニ陰

陰ニもと下同かくれ嫌之影
ハ不嫌之但陰ニ下物により

9ウ

遠ニ遙

袖ぬるゝに涙

涙に袖の露

泣ニ涙

鳥獸の鳴ハ
別の事也

別ニ歸

戀の心は
同事也

別ニ衣

ハ可嫌同面

思ひ

9ウ

に火可依

ぬとぬと

但不可嫌之由被定之

ずとずと

過去のし文字

夢にうつゝ

ね覺に夢

明るに曙

今日

9ウ

昨日

明日

弓に矢

弓張月年の矢等は
非此類但可替折

蓑ニ笠

夕立ニ暮の字

明暮ニ夕字

朝夕ニ暮の字

しのゝめに朝

9ウ

一

夕時分ニハ不嫌之 誰かれに夕字 朝にハ不嫌之 遠ニをち 窓ニ戸 ことわきに詞 いふわさ」 皆可嫌打越語 くらきに暮 10才

光陰ニよるひる 月日 但月にてても日にても一あ 野分ニ 野字 分子 暴風と書 木枯ニ木の字 青ニ緑 家風ニ嵐 10才

木曾ニ木の字 蛟蛆と書之 袖中抄 野邊山邊にほとり 天に空 淡路ニ道 山路と云てハ 晨明ニ有字 明にハ可入相に入字 嫌五句 10ウ

逢字 荻の聲 和哥云風ニ可嫌打越 歎を木によそへたらん 植物に可嫌打越 齡の三十年」四十年等に 10ウ

年の字 只數の七十八 魂ニ玉の字 玉の字ニ玉の字をなとい なかめに見 目ニハ不嫌之 形見ニ見 形見ニなかめ 努ニと云詞に 10ウ

二句たるへし 不可爲後分 物思ひに物字 思の字 憂ニ懶 憂ニつらき かなしき 名殘に名の字 殘字 おもひやる 10ウ

に思 すくなきに無字 はかなきに無字 付句嫌之打越不 知に物のしるし するへ あらましに有字 或脱一句 不可嫌之 10才

云 いづ いづく なに なそ なんと いか に いづれ」 共以すこし云かへ なりとなり なれとなれ なる 11才

となる 嫌打越 なり なれ なる 付句嫌之打越不嫌 たとるニ尋 依句 玉章ニ詞 依句嫌 哥に言の葉 同前 敷嶋 11才

の道に哥 嫌云 偽ニ眞 生死ニ命 齡ニ老 可嫌之 翁ニ老 親ニ子 已上付句 文字余事可相双之条 如何 11ウ

及打越可有斟酌歟 凡無用之文字余不可然之由 見和哥抄 矣 楓与紅葉 蟬与日晚」 昔与古 梅与紅梅 11ウ

世与浮世 世中 前世与後世 捨世捨身等之捨字 東路与東屋 以上如此類 可嫌同折 ね覺と聞 ぬると云詞 眠に 11才

ねの字 以上可 訝と寒 共爲冬季は捨世ニ桑門の世すて人 但可嫌同折歟云 戀の世と述懷 尺教の世 替面可 一文字 12才

大切之事多之替面可用之条可然云 余 三字假名事 可嫌 御字 事替面無字細歟 比字 顔ニハ折一只此 老与白髮 可嫌同 筆 12才

跡与鳥跡 可嫌 跡字 古跡之類ハ可替同折 然ハ字去なるへし 岩と石 同折 眞砂に石岩 可嫌 篠与しの 同前 竹与す 三句可 神字ニ 12才

神樂 可嫌 同面 九重与都 可嫌 都与大宮 同前 可隔三句物 12才

月 日 星 如此 雨 露 霜 雪 霰 如此降 霞 霧 雲 煙 如此 木ニ草 虫ニ鳥 鳥ニ獸 名所与名所 12才

七夕ニ月日 依爲星也」

可隔五句物

同字 日与日 風与風 雲与雲 煙与煙但七句 野与野 山与山 浦与浦 浪与波 水与水 道与道 夜

与夜 木与木 草与草 鳥与鳥 獸与獸 虫与虫 戀与戀 旅与旅 水邊与水邊 居所与居所 暮与暮

述懷与述懷 稱述懷詞事昔古老生死視子若衣墨染袖隱家捨身憂生命等之類也凡難為述懷之意不露顯是述懷ニ不用來也生るハ不可爲述懷也墨染衣可爲尺教之由近年有其沙汰云云然而墨染非佛弟子之衣服一衣色也又甚倣抄ニ墨染若衣同類見所註如新式今案可用之也 神

祇与神祇 尺教与釋教 袖与袖 衣裳与衣裳 山与山之名所 浦与浦之名所 原 松原藤原等替 其物可隔五句 朝月日 夕

月日 月日ニ各嫌之但朝の日夕の日と用之說在之云云朝附日書之

可隔七句物

同季 月与月 松与松 竹与竹 田与田 衣与衣 夢与夢 淚与淚 船与舟 舟字 天啓松天河舟等可隔七句不可爲水邊舟岡山御舟山等船字ニ

衣字 衾衣織女衣等可隔七句但不可爲衣類衣川衣手挂衣字ニ五句可嫌之 松字 松鶴松浦 山等同前 田字 生田田上 浮田森等 竹字 竹田竹河等以上准舟岡 衣川等之例可嫌五句也

可分別物

花の波 花の瀧 花の雲 松風の雨 木葉の雨 川音の雨 月の雪 夏之詞入ては 不可爲降物 月の霜 同前 櫻戸 木葉

衣 如此之類同 方ニ可嫌之 花の雪 植物ニ可嫌之降 物ニ不可嫌之 淚の雨 降物不 可嫌之 波の雪 冬也南方ニ嫌之似物之嫌樣雖非一樣當時所用如此兩方ニ可混合之物は嫌之不可混合之否不嫌之歟 浪の

花 水邊可嫌之類 物ニ不可嫌之 袖の露 於一句無涙心之句は不 可爲戀之說在之云云 淚の露 降物ニ 嫌之 淚の時雨 雨之間ニ一為冬季之間降物打越 可嫌之冬の時雨邊てハ可憐之

(二) 水邊鉢用事 (底本ノママ)

假令波として浦と付て 又水塩なとハすへからす 芦 水鳥 船 橋なとハすへし 為各別物之故也

須磨 明石 可爲水邊上野岡 非水邊他准之 難波 志賀 非水邊 他准之 杜若 菖浦 芦 蓮 薦 關伽結 懸樋 水室 手洗水 上已

都鳥 同前 篷屋 霞 網 小田返 布曝 硯水 淚河 爲名所は可 嫌水邊也 月の水 袖行水 たるひ 軒の玉水

12ウ

13才

13ウ

14才

14ウ

苗代 早苗 已上非水邊 山にある關は 山に嫌之 浦にある關は 浦に可嫌之 岩橋 薪 爪木 猿 瀧津瀬 已上 15才
 宇治川の嶋 非山類凡河嶋同之 泊瀬寺 准在山關爲山類余准之 清見寺 准在浦關爲水邊 難波寺 非水邊 木曾路 鈴鹿路 准小野吉野奥可通山類 鶴林 可爲植物 15才
 鷺嶺 可爲山類雖但鷺嶺鶴林等山類植物三元ハ不嫌之用此儀可然云 仙人掌 炭焼 雪山 不可爲山類 室八嶋 山類水邊不嫌之 富士 淺間 葛城 ハ山類の軀 鳥巢 春也ハ 15才
 松嶋 山類不來之然而非郡上は可用の外なるべし 田蓑嶋 三嶋 攝州豆州類不可爲山類 戀山 依句不可爲山類 遅櫻 松花 萩焼原 15才
 夏也鶴巢 雉子 但狩場の雉ハ冬也 水のひま 荒玉年 春日祭 初爲正以兩度祭 南祭 石清水臨時祭也 縣召 霰はしり須磨の 15才
 御萩 爲上已同可爲春也 心の花 白尾鷹 繼尾鷹 以上春也 志賀山越 有爲春之說然而近來非春 神祭 神取 杜若 牡丹 杜若牡丹哥題雖兩說依景物 15才
 小夏分 毛かふる鷹 井鳥屋鷹已上夏也 平野祭 夏也 鶯 時爲二結ひ入てハ夏也 鮎 夏也若鮎ハ春也さひ鮎ハ秋也 順磨のなか雨 夏也但其義あたらす不 16才
 可爲 清水 難也むすふと云てハ夏也只水を結ふハ難也 日晩 稻妻 鳩吹 楸 桐 裏 枯 蕩 芭蕉 忍草 穗屋つくる 初鳥 16才
 狩 鳥屋出同 小鷹狩 鶉衣 非動物 萱 枯野の露 草枯 花殘 初嵐 露 霜 露 時雨 つかさめし 相撲 16才
 放生 也神紙 星月夜 月と云字ニ可隔五句 秋去衣 七夕之具也 願絲 同上 鵲草莖 植物也 千鳥 雁にむすひ入てハ秋也 扉をくく 爲秋事可也依句也 16才
 冷 依物不可爲秋之由雖有一儀依物大切之時強用之有例 夜寒身にしむ 以上秋也 淡雪 涙の時雨 庭火 木葉衣 紅葉散て物をそむる 16才
 北祭 賀茂之臨時祭也 豐明節會 非夜分 小忌衣 日蔭絲 共神祇也 年內立春 已上冬也 椿 柏 蓬 葎 淺茅 忘草 蜻蛉 16才
 鷗 鳩 同巢 松縁 已上難也縁立若縁ハ春也 塩屋 宮居 寺 家を出る 尺教也 里神樂 已上非居所 都 御階 百敷 雲上 16才
 九重 已上不居所不名所 簾 用也 床 御座 已上居所也 草枕 柴戸 松門 杉窓 菅笠 篠庵 草庵 浮木 流木 爪 17才
 木 柴取 繪に書草木 依其物其季あるべし 催馬樂等之名 可准繪 衣裳之色花木 不可爲植物依其色可有其季 木をきる しをり あし 17才
 鴨 あしたつ 竹宮 爲名所已上非植物 軒富蒲 末松山 篠枕 稻庭 苔庭 蓬 ガ 宿 蓍宿 夕顔宿 草庭 草を 17才
 刈 已上植物也 水鶏 水邊也 螢 蚊遣火 筵 枕 床 ゆかハ 又寝 神樂 夕闇 いさり 已上夜分也 浮寝鳥 心の 17才
 月 尺教也 鶉の床 心のやみ 其曉 夢世 常灯 明はて、 明過て 朝ほらけ 三日月の出る 有明 17才

の入 鐘のかすむ 已上非夜分 焼火 影といひても不可爲夜分 夕月夜 非夜分也 宵 非時分 タニ日晚 時雨ニ 時の字 名所の春日ニ
 春字 日字橋ニ花 雷ニ神字 雖不嫌之不可 權ニ朝字 但其意不 日ニ畫 稻妻ニ月 日 已上不嫌之 下紐 ひれ 衣袂也
 帶 冠 沓 衣 非衣袂恒衣ニ可嫌打越賦云 佐保姫の衣 非衣類 平秋の句ニ「戀の秋の句付て 又平秋の句 付之不可
他准 朽木と云句ニ 杣と付て 又杣の名所不可付之 生田と云句ニ 森と付て 又杜の名所隱題にも不可付之
 槓ニハ 木の字を不可憚 真木柱 槓木戸ニハ 木字 五句可嫌之 良材故也 躑躅 卯花 木也 藤 草也 あま小舟 泊瀬
 山 舟字ニ付て水邊ニ可嫌之 棹姫 春也 龍田姫 秋也 山姫 雜也已上非神祇 無常 述懷 懷舊 引合て三句可用之 述懷 尺教之詞 爲一句之時
 は可付」釋教之方事也 てにはの字相合を不可付之 東遊 求子 神祇也 野の宮 同前 神樂の名の葦 准繪但秋季ニハ不可用神樂之方爲本 櫻鯛 櫻貝 名に付て可爲春賦云 櫻人 櫻田 可爲植物 菜つむ 爲春 野遊 非春 詞の花 同前 あたゝかななる 日の暖なるハ可爲春云 水のぬるむ 春也 かすむると云詞 非隨字但詞のつゝきやうにて可嫌變物 〔若葉 春夏有兩說加花は爲春然而夏季大切之間可爲夏云〕 ねらひかり 獸事也
 紅葉橋 爲天河事間不可爲植 初塩 色鳥 秋也 思草 植物也可爲秋也 戀草 非植物 忍摺 同前 頭雪 眉の霜 非降物也
 夜の更る 露ふけて 非時分 御祓にはらふ 蛙に河字 つれなきに 無の字」 いさりに 船 釣ニ 舟海士等 不可不嫌之
 夕ま暮 間の字眞字 山の雫 軒のしづく 降物ニ嫌之 老に若を嫌事 無其謂賦若年壯年等之次第也親ニ子与ニ矢を嫌類ニハかはるべし 深 キニ 淺 キ
 遠 キニ 近キ 此きもし嫌事此類多之不 何字ニ 幾字 付句嫌之打 さ夜 さ をしか等に を舟 小篠の小字 同前 鷹ニ 狩
 付句不可嫌之 民のかまと 居所ニ 夜の明ニ 戸をあくる 付句斗嫌之 横川 非水邊 蓬仙 非山類 山かつ 非山類山字ニ 山鳥 同前
 すそ野 山類なくて 龍 獸類ニ用たる事もあり然而別種 鷺 非水邊 菅 同前 船 海路渡舟ハ旅也依句賦不可爲旅也 さかつきの光なと
 月によそへたらん 日に二句可嫌之 然而可爲秋 鞠の庭 庭の心ならハ一庭の外如何 國の名と國の名 可隔三句 國名与名所
 可越 國の海 名所也 名神 非名所 あつまに越路等 可嫌打越也 もろこし過て から國とは有へし

春秋戀以上五句春秋の句ハ不至三句ハ不用戀の句只一句にて止事無念云「夏冬旅神祇釋教述懷懷旧無常在此内山類水邊居所上巳 20才

一 舂用事

岡嶺洞尾上麓坂岨谷嶋水邊ニも嫌之山之關以上山舂也梯瀧仙木炭竈以上如此之類山之用也他准之海浦江湊堤渚嶋冲磯干潟岸汀沼河池泉洲以上水邊舂也浪水氷塩氷室以上此類也清水かもと也なと云ても水邊用也浮木舩流塩燒キ塩屋水鳥之類蛙千鳥杜若葛蒲芦蓮真薦海松夏也和布若和布ハ春也和布刈ハ夏也藻塩草萍海士闕伽結魚網釣舟筏手洗水懸樋下樋以上舂用之外也新式之詞有相違仍用捨之軒床里窓門庵リ戶樞薨壁隣以上居所之舂也室戸宮非居所庭外面用也人我身友父母誰關守如此類人倫也主独媒同前親子と云ても人倫也月をあるし花をあるしそうつ山姫木玉ふたり以上非人倫花のあるし月の友花をあるし月を友と云にハかはるへし依句舂可爲人倫也 21ウ

一 右取要出之

右大概准建治式作之 但當世好士所用來多不及取捨 只爲止當座評論粗所定如件
應安五年十二月 日 後普光園攝政殿

新式今案奥書

右應安新式者 此道之龜鏡也 永不可違背 但未定之事 近日相論之題目等 或以愚意料簡之 又訪宗 砌法師意見 粗所記置也 此外漏脫之条、及滿座評論者 自他加斟酌 後日訪先達 可決是非者也

御判」 22才

享德元年^{壬申}十一月 日

後常恩寺殿

関白御判

22ウ

連歌初學抄

後常恩寺殿御作

一 往古以賦物為題 或百韻或五十韻 每句用其賦物 近代發句斗有賦物之沙汰 脇句以下一向不取之 仍雖似無所詮 聊不忘旧儀而已也 發句ニ取賦物之時 二ニ渡をハ不可取之 假令山桜と云發句ニ人字不可取之 人ハ山にも渡故也 自余准之 又三ニ渡賦物同前 一字露頭」賦物者 近代も百韻連哥ニ每句悉用之 尤有其興二字反音 以下賦物ハ千句連歌 發句斗ニ常ニ取之 賦物之字上古者 百韻之中不犯之中比面八句斗忌之 近代無其沙汰 頗可謂無念 仍近年者至第三句 賦物之字斟酌云

23才

一 發句脇句之同字 并物名をハ面八句之中 雖隔五句猶可嫌之

23ウ

一 聯句中可定其季等字事

暖芳 有花之意 紅 同 淑氣 燒痕 踏青 芳草 如此之類 新緑 霖 雨イ 暑 炎熱 草木之茂字 清和 四月如此
夏之類 初涼 新涼同 冷爽 金氣 黃落 如此之類 枯 草木之心也拾枯薪也 臘 探梅 春イ 春信 守歲 如此之類 信 書信
客之非夜客之客 一葉身 舟 歸字 漂泊 如此之類 錦字 御溝葉 私語 如此之類 人名 可為人倫性是不可為人倫但可依事也 名利塵 世
意 浮跡 出處 幽イ 一絲 釣絲之意可為水邊也 禪定 錫 如此之類

関白御判

24ウ

和漢篇

一 大概法可用連歌式目事

一 和漢共以五句為限 但至漢對句 可及六句事

一 景物草木等員數 和漢可通用事 但 雨 嵐 昔 古 曉 老等之類 和漢各可用之

一 同季 可隔七句 同字 并 戀 迹懷等 可隔五句 同連 月 与月之類也 隔五句之物 25才

可隔三句 山類与山類水邊与水邊木与木之類風 日与日風与風猶同字嫌物也 隔三句之物 可隔二句 嫌打越之物 同連歌式目

一 山類 水邊 居所等 不可有躰用之分別事

一 萬物異名就本躰可定其季 但可爲本躰外事 假令 金鳥ハ日 銀竹ハ雨 金衣ハ鶯 鳥衣ハ燕 霜蹄ハ馬

鯨ハ鐘 如此之類 可依連歌異名物之例」 25ウ

應安以來新式今案之追加條、并近代用捨篇目等 依多其端末學常迷之 商量而今彼是勒以爲一冊 但 猶未一決之事 或暫漏之 或先載之以待後 君子志同者從之亦宜乎

文龜辛酉林鐘上瀚

肖柏」 26才